

番外書冊

和書門類	一八二八五	二三八	一三	720
函號	二八	二	二	
架	三	一		
冊	八	二		

內閣文庫	
番號	和 18285
冊數	2 ( 2 )
函號	204 200

內閣文庫	
和書類	一八二八五
架	二
冊	二
函	一

消息澤文



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



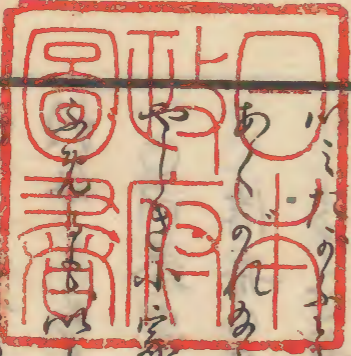


消息譯文

黒澤翁満著

○源氏物語東屋の巻津舟の

君の母より辨れ許ふ



ハミナノサキト。オカトコ小あん  
あくのねふんふ。志のぢりもあ  
や。小字小かくろへあ。あ  
心づ。く。い。ほ。し  
ちうき。ね。お。ら。ま。う。を。持。お  
小わ。し。心。や。ひ。う。く。ま。と。ぢ。ら  
海。き。山。う。ら。ぶ。こ。そ。や。と。く。も  
え。思。ひ。た。で。お。ん  
方角と。以。避。の。り。ぬ。あ。と。あ。方。と

○消息後編下

○一







少頼も深き世経もは思ひ程  
く不赤利く世の中は所はた  
れ母方方と身一に後殿と存  
とり候は所は

○同巻中の君ふかきりて大輔  
が返事

さらばかのやれふかきりて  
たふ志い候ていむつうが  
お先程とさてもほごいひつぐ  
まぶりのほご  
左より西の方女部を隠密  
い端を元信りう其見苦あて  
有くは侍も右らもは運るは  
ゆぐ世くは所頼りのやん

○同巻浮舟の君ふ母より  
いふつれぐふんおらとわさち  
一あふらんまご一志のびとぐ  
しあ

あ何は入は候りかは思退るる  
は見馴るは候かゆのたこの思  
ををまは世は幸抱つら

○同巻浮舟の君は返り

つきぐいおよこのうちやほくえん  
はごうたうれしうら備しせれ  
中よあうぬあし思はごうが  
ゆも退るは候氣樂るは思  
一ふせゆは候は候は候  
の有くは候は候は候

○消息後編下 ○三



○同奉書君宇治より系に  
まごなりあまねほしけのほろご  
てあごえたまへおきてはふより  
しき日なりはれはふまごの  
しきにわひこまりはふと思ひに  
まへいでおんけふあはれあま  
つしきゆらふまご

未お網魚の佛辨く莊嚴寺一  
見波並ゆ方今日良辰自ら急  
ありゆふ祭海波ゆゆるお考  
ゆゆおね忌有くゆ後心けゆ方  
今明日あえらるお慎てらん  
○同浮舟の巻右道より大輔れ

ゆら

としあらさやうしほごかきぶ  
らふはらさるゆふたのま  
しきゆららじおほくゆらむ  
あふはらさるゆふたのま  
ゆふたのまをゆふたのま  
ゆふたのまをゆふたのま  
わらうまのらせまひてゆらむ  
おぐさあさせまへおのひゆら  
ふつさるくゆららさるゆら  
にねぼしこりておんはれらさ  
こまにゆららせあふゆらたまき  
おまへのゆららせざらんゆらに











ウタハ

○同巻から下君より同君に  
うづうらとあひはらとわうな  
まさきうらふほくてあん此わど  
のくらうがきとわうわうく  
くくくくくくくくくくくく  
死出で中よいな好ゆれ難去  
故障多くはた名は使し入  
通くく存ゆれ都る詩をる  
日と立急せん

○同巻浮舟の君に母より

泳めよよの申をふいときわがし  
くつんえあひつれはど経とら  
くふせきせねどーゆるやうて

おのゆめれのち。はらきざりつ  
けうやた今ひるねしてゆゆゆ  
女ふ人のひびとつふくねんええ  
まひつとバおとらきあづらたて  
まひつとくつーゆせあ人な  
れらるは女中いよておらちよ  
らせあふ人のお申のりもひーお  
おろくくおや備ーばふあせき  
せあふととーも申んのかくを  
まろづふおん思ひまうまのり  
こ備ほーまこと少將のうこのねん  
と心めとねげふものけたらて  
おやとゆれをがて時またらさ  
事といきくいんれりてえ



世のちりき寺の中はぞ経せさせ  
たす人

昨夜の夢、甚く不吉、内容膝  
と押し、少る、申す、浦経の夜  
中、別右、悪友、後、使、森、石、  
少、所、歎、唯、人、石、園、空、森、石、  
夢、世、忌、友、使、中、唱、小、寺  
容、所、と、又、押、少、方、驚、入、石、  
教、所、向、中、石、石、石、用、心、石、  
少、根、寺、石、人、家、寺、寺、石、石、  
少、白、拂、石、石、寺、寺、石、石、石、  
石、縁、寺、石、石、甚、甚、石、石、且、頓、  
石、入、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、

は度、少、持、家、内、今、石、肥、立  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
時、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
浦、経、石、石、石、石、石、石、石、

○同晴鈴の巻おけ 君同今り

心とおぼつらぬきにまどろまれば  
らぬに、も、こ、す、以、由、石、石、石、  
少、け、石、石、石、石、石、石、石、  
つ、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、  
石、石、石、石、石、石、石、石、石、





甚く時を去る由葉とて使は  
るん故この有るは昨春の  
おしあし度くおはれお  
氣聲はつる兔の角の湯比の安ん  
近は程すは川越のいお  
先夫は此方より途すん今日  
雨天このお成ゆ方早くは  
○同巻浮舟の君行方かく成る

つとまき小葉君より其母乃

もくに

あさ甲しよふいまづきこえんと  
おもしあしととまきのおら  
んもくらさくらさくらさくら  
うめさやこふらまざりんさうんと

そのほどとけりつるに  
日はもつふらさつとねんよのつね  
あさよふと思ひのどまじう  
くはゆととおまひのやうにも  
ふづりつとふらさつとねんよ  
かふらびさつとさつとさつと  
は悲傷の成は早速は梅の  
をなつあふもお供は眩暈  
起ゆ月列るさつとつとつと  
は為立と昔者おをを  
久くは不沙はお成を思入  
し無方く速く成はさつと  
習入未納迄きねをなつ  
あ介お長らひ者を故人の

○消息後編下

○九



合する必は用事と云ふは尋てん

○同巻母君返事

いこいこさうふさおきゆりぬの  
ち成さうさうくおのひあへぬげ  
きゆらぶかろおほせごとえうふ  
べりには少やとねんごころは  
んほさきありさ備とえあへれ  
からせれいおびぬりぬおれおこ  
とりふおもうあへしつがぞど  
けおきほひしこととゆくさあお  
かくたのささえさせゆりした  
ゆふうれあくえあへてうに里の  
ちぎりもゆとんうくうれーく  
あんさぬぐふうれしきおほせご

いのちのびゆりて今さざしぬが  
らへゆらばれたのさきあえさせゆ  
るべきふこせと思ひあふたつけ  
てもおのまおねとごふられゆり  
てえきこえさせやらびあん

大妻と彼と自亡命は信とあへ  
事と人心に任りてあふさき想  
そ果お歌死をいふおねと信と  
あへぬふおせりへのおとあへ  
是進んぬ細きおね子とおあがら  
右に新く候あへるのさ信とあ  
あへぬとあへるのさ信とあ  
と信系長くおねあなあへんま  
信とあへるのさ信とあ



て名もく、そらん後長癡、悲  
歌はの成、のたを様、野有は  
とありの事、美延命、素  
お成今習お命はり、あお  
語は成とあり、そらん  
少月守もそ向に想、野有は  
ふ何事、お成、そらん

○同手習の巻小野の尼より

信都おとと

おほあり、あひて此人たは、けり、あ  
きす、ふらふま、信もあ、そ、あぬ  
まじ、うら、そ、あ、人を、つき、そ、そ  
やう、した、もの、さら、ぬ、ふ、そ、そ  
あ、先、れ、あ、が、ほ、く、け、京、よ、い、信、あ

ま、ご、そ、あ、ら、先、あ、ま、ご、い、あ、ん  
あ、ん

何分、下、山、の、成、下、け、人、の、助、り、下  
度、を、お、の、信、を、今、日、近、息、信  
あ、ん、い、ま、お、朝、お、あ、ん、の、茶、附  
お、い、所、あ、る、と、近、息、の、成、も、あ、る  
我、所、に、出、京、も、い、は、れ、つ、り、は  
許、容、せ、い、も、い、は、れ、つ、り、は  
あ、先、近、い、成、も、い、は、れ、つ、り、は  
あ、ら、り、あ、い

○同巻手習の君のうと中將

より、小野の尼のあ、い、に  
よ、い、う、ら、い、と、そ、ら、ん、あ、い、ゆ、り  
い、う、ら、い、と、そ、ら、ん、あ、い、ゆ、り

○消息後編下 ○土



又すうらむぬひのこゝもよ  
え中のつらきやしもぬぞめ  
まじらふはなましあがし  
むうりきしへおさせま  
れぬてくはずまぐりま  
形ふうい

昨夜も一方ぬれ心中混れは  
ゆる早も退出は其状ハ  
故人の故も現をさるる  
考後、その故も此上  
少くは合点も余の  
奴下、度は消念し  
候、その故も、  
よりす

○同後、浮橋の巻僧都より小野  
尼小

よぐ大將どの、使をて小君やま  
うであうし、このらうけた  
ちりし小あぢきぬく、うりて  
おとーゆりてあんと、はえぎ  
ふきこえあへ、づうらき  
すんきこ、おほうねど、  
まぐりてきぶらふべし

昨夜大將殿も小君より人使  
使者とよとらぬ、  
承知致し、  
うらぬ、  
○消息後編下



おしゆれ今頃りるーゆら宗  
上うねい

○同春おれ人より浮舟の君ふ  
はさつたに大将どののおしゆい  
てはありさるたづねとひまふ  
とど先よりゆきしやうくとし  
くきあえけうぬはくろざし  
ふうりては中をそむきまひ  
てあやしきぶづつのおうふま  
しあつる事かつては佛のせめ  
おふべきさうねとあんうけぬ  
りおぶらねはくはういせん  
あいのほちぎりあやまちないで  
あふちあつたところかきこえ

多ひて世をけれくどくははり  
おまのあれはわたのまをた  
まへとらん。へくおひみづの  
らさぶらひてまうしゆらん。  
うつぐこの小君きかえとまひ  
らん

今朝此の大将殿は入身は  
ゆるは容許は守りぬいし  
初めは後妻細言上くぬは  
志保くは成はなれは中と  
宵は下賤く野人、交りは出  
家を車らうり印は佛罰とは  
あがりありは初らぬは  
入しはと文は方せくはな



此契約をせりては成る後執  
罪と詰し一日しは  
出家の度量の切ははるが  
は還俗の終は信心を成るに  
み念をなす細く成る身  
を成り上り上り若くは  
この上り上り

○同卷若君よりあるし君れ

さらふきこそんうとあくさ  
くふつとあさきは心とば  
ふおもしゆしきこえて今  
の心あさふしうりしよの  
申先づり成だあしき

らるの心あつらわらうき  
あんて人先はふのりれ  
しとなつたをさるべし思  
るぬ山よりまじうか  
んやとすれとまひぬらん  
ふもゆくへたきはかみふん  
れものこそあん

言語同様の罪と心重なる  
ぬ心術の成る清く免  
あり流しゆるか今うら  
濁り長衣の長衣と心  
度と氣堰のなれと我余り  
施き心故増ら他見は  
くと身存ははる登山

○消息後編下 ○十四







いづつきづくおれんものあがえ  
びきりかりしうらひあそら  
や先うひしそのおのびくま  
れづいさきまきこむせほあし  
そのとおれん

自奉らるる入のれも後  
ゆり代筆るる入は行は文  
ん強なる不向は甚淋愛好  
ゆ後にはたな正氣とれ先ひい  
ほく苦痛と忽は止ら下れ  
系は西洞識新をなほゆら  
ほ紙とてはあう厚款息致  
ゆ成ゆな

○同巻之將殿よりゆだひの先

のうれりた

いづつおささうくしてきこえ  
はありふれぬおどろたれより  
もとひあつぬさてあまひ子あ  
れはのころそのおろしきむね  
くらなるると風もやうひたす  
とまぬんあのみきじおどろく  
ふまのらせたまへかこせほも  
ゆらんじくらんきせき

け男中多忙るゆ不沙汰致は  
ゆす何れ其元ともはききほ不  
り下候外と存は然と此ふと  
産婦く多生おゆなな甚き  
いふにやうゆり凡疾ふゆ拂



成り候こと此月之をいれ此種ハ  
梁上此等とすらん交野ハ  
肉とみれりやうやうは味ハ  
多り度

○同四の巻かより少將れ

もとに

さざり候院よりわうれまの  
ことあおとをおせでつとあ  
しくおんやうきつこらうし  
おしおしあおととあんてほ  
しかり中けりせだしうものし  
あはびをいふうれしからん  
まきよりが大まきと思ふあり  
うれらばくおしあふべくハハ

あふうきりあらん

嵯峨院より若菜献上の候  
ありしやあは系とらと甚ふは  
あお合とておとんはあ芳と入  
り候は候は氣毒といはれは  
石公来ともきりてあや斗  
大慶より候は政頼が大切と存  
し候は折とん是非くは出勅  
あり度はゆりあや斗大慶  
の候は

○同六の巻朱雀院より嵯峨  
院に

とすしたうくおれりてそらの  
はれぐしうありゆるふまの月



侍のめをばおびしし見あへし  
申あしきふさう侍きてきんひ  
うせと給侍ふをづらうれ  
まゆふもめん故治部卿の侍を  
んおほやけ人として侍りし  
ふふ身をおほやけふあさう  
そ給あしつうひふゆ侍あ  
の風をあひておほくれし  
そのめはもあひみだく  
しき先と見てたむく  
侍りてのちおあしきせうふ  
そくも侍り給ふおくまり侍  
よき侍の ととこおらまじ  
あばいふふ大侍ゆふさうや

しくあんとよひのあしたありひ  
あふふこれおとくやまき  
侍るはた今定者くらし  
や

老年、孫娘を放心ぬれ、お  
娘のふけ典侍、完る心第一見  
ぬゆ候存おは裁ゆの強参る  
ぬ侍ふ、及ふお侍事、お  
しん故治部、以て相伝は候人  
孫に侍も其ふ公用、お子選  
唐使、あう程風、る漂流被  
年、る父母も對面、る及親  
合、る白洲、侍、る後、同様暫  
い、る、相果、る、有、る、典侍、男







めくら  
びづらちのふまわりとんとすん  
るをうらちと物とてあんな  
春日へあんまう侍はるきこえし  
こゝに甲ごもれーあうねも侍  
らんごのほいあやーあうら  
あん。わやーくもぬきま  
おれまのわのみうさの山いし  
てゆけどもゆけどゆへん  
此程より殿は夜を好ゆ引  
續お忌よりあしはは今日  
と春日と春侍はるあう中上  
とあゆあは末は果ーあふゆか  
此はに故の侍はるあゆあ

中名い山と若る茶ゆあ魚  
候に備けはるあゆあ  
くも新茶を好

○同十二の巻源宰相より宮

小治進奉

けふおぼつうねよわにあり  
侍りはるあがーあまうてきこ  
えさほるにわあーあまう  
ほせーあがーあまうてきこ  
あうりぬるあまうてきこ  
ふの侍らんよの中ふ侍らんも  
あまひあへぬとあやーあま  
でえらうひはれぬとあま  
あまひあへぬとあま



わさる今少海を打る事ん服  
必入事なるゆふ事ん難有家治  
ゆ東洋らな洋文い年米ぬ  
と彼と少海ら事命、うはた  
ふを事ぬゆふ事ん後之唯今を  
お昔らへ種をゆふ事ん存  
命いゆは根、事ぬ

○同十三の巻若事や依んぬの  
里と忘る、我あれま、や  
悟まざらんと北の方乃  
海く物、をた、ふ千、蔭のお  
と、れ、は、逆、事、

おやま、く、けりて、内、も、事、あら  
ば、ま、り、あり、ま、さ、さ、は、ら、ぬ、ま、

らん、事、ぬ、り、も、事、あり、と、ぬ、ま、  
た、先、ら、ひ、て、ま、ま、く、や、ま、の、う、ら  
ま、 あ、れ、ま、く、い、事、と、ま、さ、し  
む、ま、の、う、ら、ま、や、ま、の、ま、の、ま、の  
あ、ま、の、事、ぬ、れ、ば、方、ら、事、ま、ま、と  
ま、れ、し、ら、ま、

不、方、ら、事、ぬ、は、ま、お、り、他、り、不  
ぬ、ゆ、ら、ま、ま、も、事、ぬ、ま、ま、の、  
お、ん、命、の、内、事、ま、ま、の、誠、の、内  
事、の、後、と、其、え、ゆ、一、人、の、ま、さ、  
信、を、惜、す、の、事、ぬ、と、共、に、は、ん、方  
外、の、事、ぬ、ら、る、事、社、余、事、の、事、を  
ゆ、ゆ、事、と、事、ぬ、ら、る、事、の、事、ぬ、ら、る、

○同十五の巻源宰相よりあて



官小

今ハきあえさせトと思ひのれ  
どほどもおしとうひふなれ  
よりおしひもあふりぬを  
やううとふたれをぬんがう  
いふおれをさる人けすりぬ  
よりハ志ぬおまもづれと思ひ  
あふれどもおれもかくおづら  
及なまきうちおせし。

思ふこころがこくてあるばい  
のやませよとやあらんうこづ  
むとむねのうけゆそのうちふ  
もがくあんときあえさせてや  
ぬらりのゆもづれあが君いふ

せん

最早ト上り安んず存ゆゆ  
死期迎き方すゆ物ゆゆ  
信念し時一方す月十と  
ケ根に量く苦痛と文ゆハ  
早く仕を仕度な存ゆゆ  
もは存るるさ道に迷ア  
存を存れゆゆ彼とゆゆ  
相果ゆゆ胸に寒則真ま  
このおれを存ゆゆ平年  
成すケ根くく中果ゆゆ  
ふゆゆゆ

○同十六の巻同人ト同官小  
うげあらぬ身と思ひぬとあら



ぬやうあるががーいよよきあえ  
させどと。うまぐあもひあふ  
れどつらぶらふなりぬらむかり  
もあぼつらあきてやいぬらぶ  
ひどいれどいづや あいど  
だふ門とぬらえとどしをへく  
かくあぐきやいづらゆくえん  
とふ今もさつぬらあきどいせし  
やしたのときあえさせてあん  
いまのねえどらひはくあが君  
くたすけえ

合限と忘却はゆもおありの  
すまな息入ゆらす上るあ  
楽なほお返しゆゆええあお

果ゆいす事さへゆゆもせしむ  
余りに口情をなゆらす上るあ  
海と川とおぬらねは言へるあ  
うる年月長きあおぬらゆゆ  
ゆ方へ糸ゆゆもあ審にゆゆね  
ゆ丸上もせしむゆ余りゆ情を  
ななゆゆ唯今も相果ゆゆを  
よもゆゆゆゆああゆゆ海書  
ゆらもゆら成下ゆゆ史とね  
皆生長らんゆをゆゆ何年く  
ゆゆゆゆゆゆゆゆ

○同十七卷宮下り大后殿よ  
せらあき事ありてなびくお  
しあくれときこゆれどあやゆ



しげそのこころをささぐもおは  
せぬさ偏よりあまのこゝろにおち  
まのひらく山やたゞあうらまよ  
にたちねづまよのしあか  
うびすもあらば人あれづられ  
あゝ方よ、あれがまもむかしは  
人よふららんうきりハおが  
しよらんうきまえはいせて  
あまのこころをささぐも  
づのうれしからんともはれ  
よりきこらんうきまえはい  
難き困事有く自法入来を  
下ゆね厚く入ゆね行付も  
ゆめはく流く有くゆめはくも

出入りあまのこころをささぐも  
杖よりあまのこころをささぐも  
ゆめはく流く有くゆめはくも  
ぞ見下らもゆめはくも  
生中ハ古老くゆめはくも  
漢合流く流く有くゆめはくも  
万事、竹の流く有くゆめはくも  
流く有くゆめはくも  
そゆめ一寸ゆめはくも

○同卷宮の許へ大臣殿より  
ゆめはくも  
かしあまのこころをささぐも  
ゆめはくも  
んざらにさしたてられはらん





たらしうごきまきはらぬと平  
らなあひうらうはつらぬの  
おやのりたまうできて候  
らばらびゆうてつらやーく  
らんごつげまうできつれむ  
あしもちやなうはれま  
ざらんやうてみだり車はら  
まかりおきてあんむうしれ  
かまはらうおはせらう方  
というてはれまきまき  
あはてられはらばまあり  
らん

謹むは洋見はけ方中ハ所氣  
し難物よこの有しは一切あり

出来ぬ申候と平候に色を  
ゆふ年米ぬ便とあし者は  
親と洋に糸急病おは甚大  
切に及ゆ旨おは紙ゆり  
まらまおけし方あり  
もあやと存候から車  
紙紙ゆ候に所たか古突は  
振と候と作下ゆ候は万  
共この存な紙といはし  
安らおけゆりま

○同巻右の丈このより言

はらま

かーとほつてうやなまりぬ  
あはせらしたるこよふ











けりやまわりはうんこい。此も  
はよあすまわりまよぶうり。あれ  
トくハこそねん  
滋之くくろ下置の風輪と注白  
身跡見を大受と注記の故に  
早進下ととま存をふくは  
何等事作の故も注記の故に  
如何に注記の故も注記の故に  
斜的注記の故も注記の故に  
注下注記の故も注記の故に  
山岳承りし山岳も甚るる若  
なす好むは交ハ拜一ありん  
ふれぬの故に今注記の故に  
おれりトと注記の故に

○同卷新中御言殿より女御の

御言

いさよ〜田舎のうらは〜り  
こびにま〜り〜らま〜り〜  
き〜え〜せ〜し〜し〜し〜  
げぬ〜は〜め〜ら〜ら〜ら〜  
せんち〜ら〜ら〜ら〜ら〜の  
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
ふ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
ほ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
を〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
め〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
今〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

























山ごりののらぬきやうやと  
あひもてでふる年月は何な  
れやれれづゝぬこりぬる終の  
日くまふふ心もがうあまづれ  
あひひてあひひまやう

頭：膝田く膝お動すゆ分何状  
と後取にお同すゆ分何状と  
石似合く根はぬおる人せりん  
ゆ面とよ取ゆると年月ハあ何  
波は物おれれりも言難く海は  
長き物：ゆたはぬおるもゆ深  
淡くぬいゆ思ふる此方へあき  
内侍入

○同卷春宮より友室の西洋小

たびくきま申れどおものこ田ハ  
せざれれれぬおわつうわくあん  
くのあやかりささぐあんきく  
ふくきこんしと思ひまはさて  
をけるマドにれれれれれれ  
ともふありておれれれれれれ  
しかくてハおれれれれれれれれ  
いはやちいさき人ともあまし  
ゆれれれれれれれれれれれれ  
ちまさらぬれれれれれれれれ  
かみれれれれれれれれれれれれ  
らん

度くは法意のゆたはゆ事一も  
きくゆる基はれれれれれれれれ











からり書後後には後之書  
○唐くば相借一の巻少将よ  
下唐くばの君れりん  
いふぞやよぶのぬひさし  
のいさらまごぼらひでばや  
きくよほーくろせさて笛こ  
まれきまにりとりてあんだ  
今内のはゆまひまめりり  
あやゆはゆふ昨夜の燈を  
依ハ立腹未ぬ十出ゆ水夜  
ゆ返りお樂の相笛を忘並  
中ゆ月けまゆ後一り下夜  
只今所新く遊遊昇殿の  
ーん

○同巻あときより姨のゆふ  
とみなり事そてりて先ゆり  
ぬいづりしき人のかこづふ  
さうふ物あふづきふんね  
ひらさていものわりのふ人の  
こまびんおきハえんてけ  
らじおあひゆりてあんさ  
きやけふあやせんやあはくハ  
あやきさゆりなれどとみま  
おん

俄に後らるは守心とる隔ん  
ぬ人の方角を避り遊影を  
のまらぬゆ月几帳一ツそ夜  
着蕭条送る可なり後ゆ



余り藤相公の書一紙を  
存し方お趣も亦もはたゆり  
以て其下万歳其喜ゆる書  
介る数紙にて其れゆ火  
急す自此版お致す

○同奉同人より同人小  
心と云ねしうきさえさせたり  
しものことあせたりしあん  
よりらびきさえさしきさあ  
やしとおぼさるべれどこよ  
ひもちひねんしゆやしき  
き備してよりけりしうらぶ  
きくさきのねどけりねくは  
ししあにせよ備らうどあん

むしと舞ひゆりしとほす昔  
のかたがぶふねんけりけり  
さねてこのものごとくま  
はくさきとふのたらしはさ  
のきよげぬらんときりあ  
らんしうら門あていしか  
らりてはねたのみきこえさ  
きう甲に

法寺心中と云ふ評信を伴  
付らむら辰辰の経をな絶謝  
沙のほあ富のいしを思ふゆ  
今既而似合に併入用は後  
に盛合せの集物等ゆた  
ふがとちりなは客人の贈付



をゆり糸四十五日方角と遊い  
方こそたれを併從者く白の程を  
引死すし何年鹽梅し  
見若ふとくと暫時心貸  
りなれぬと知入の候にハハ  
少ゆが所便に存存りる所  
ナレ

○同二の巻典藥助より若く  
はの君ふ

いもくくいほくよひよ  
ぬやませあひはるこころをねん  
おきれの物のあしきこころを  
しほふ。あましくよきりふ  
れしきあつんせまふあしうたふ

ちかきまぶらりいのちのびてさ  
ちもわらうくありはるべしあが君  
く。 老ふはくくハハハ  
ちいづはあはれまじい  
君よふおれん

減く心氣毒、後常心苦痛  
りぬれ候と老人に名色は  
を好い何年く今候ハハハ  
共愁眉と心算うせりり  
浄例進くさくを立りり、延命  
後氣もも若くはおれりる何  
卒くく人ハ老人と侮り何  
くも若やぎのら貴之發は月  
そりなを存ん

○消息後編下 ○三十九



○同春居るはの君れ女房の  
心くぬやまうせきせのひて  
ゆふもみづうらいえきこえぬ  
まじ。かれをて今いかきり  
の老本よいつうれきむい  
さくべき  
甚い舌痛治らぬをゆるす月  
今に逆事い得ぬはに憔悴  
おれりい老婦い若やきら  
女大まて致時命いいつい  
よありきやをなほ

○同春あらざり姨のりた  
いそぐりゆりてねんきのみふ

はふきこえきりつふけふはすの  
わづふきよげねらんまうらば  
あまもえんははあまもまよ  
きわらひあらびひりりあさり  
かしまあやういたる先に  
きあえん。うらりさ偏ふなを  
せよ

取込し後いれたけり明今に  
お向あしん今明日は月小姓  
中老位は女中い女居り下  
なかに元も小姓い女居り  
一商人い貸つらむは妾細し  
沈み弾眉とてとゆら一寸は  
本條うらむ



○同巻娘の返事

おぼつうおぼふおぼふよりきこえ  
とらしうむばやうひきまう  
きわぎしと近ぬひあきとて  
使ともほりくうこれぬべう  
まらふとからうしおんおに  
てきさうりしかばひうあらんと  
思ひぬくながまつらうれし  
くたひらうお物しあへる事  
人の今案内してきこえんあ  
よさぶらふかぐしきこの  
おしあのおおれいしあしそに  
おししうらおさやうに物しつ  
べられ

余りお妹遠んこをりゆる此方  
お便波りおをきるおは跡  
上におおきらぬお方とる使し  
者もお擲をぬお様お後にお  
おはぬお跡中しゆおあ  
お後おと案し款おをいお  
お平安にお入らぬお大お波の  
人お後におお通り人おをい通り  
このおおをえこおはにおお  
おおおお主人おはおおお  
おおお人おおおおとあおお  
お合てん

○同三の巻御門督より中

他言殿

○消息後編下

○四上



きのふ裁前ののこりしてききえ  
しほせうそこの中はされんや。  
はひまありばらふうおらげた  
ちよりせしきこえさくき  
うりり

昨日の紙を中へ奉れまお  
を中へおし困ぬははたは  
今よりは球を中へ奉れまお  
内へ中へ

○同巻大納言殿の八溝の時  
中納言殿より中へ君よ

はしたふとさこしあぼりたち  
はるとかくおんともめたまにざ  
りはらふとさこぶくとくおはれ

させたまひとさこつらく  
おん

大功徳は後思をらおまはた  
根をおおるあまの二世あま  
し飲、おわらふ万歳思をら  
はたはらふとさこ

○同巻御門督より中納言殿へ  
きのふはこれゆくとくもはり  
しはこれゆくとくせまひうは年

せびありや、およりたふとき  
ぐたらよりせまはげむ心うく  
あん券これおよりたふとき  
あひうしおよりたふとき



さらばおびんおききまはり  
おぼしたるしがぎりぬくとい  
多人おだくづくおん

昨日より日経、若くは相沙多  
なまぬお急お救ゆる年暮く  
お相沙も将ありとゆゆりお急  
お存ねく、お急お方もお急お急  
お本急を存て平お救券も  
何れお急お急お急お急お急  
早くお急お急お急お急お急  
お急お急お急お急お急お急  
ゆふと昔お急お急お急お急

○同巻中納を叙し返事

やがてまきのふいさぶらんと思ひ

—お急お急お急お急お急お急  
うお急お急お急お急お急お急  
あけられさきぶらひね—  
思うお急—お急お急お急お急  
さきお急お急—お急お急お急  
きよ—お急お急お急お急お急  
かうせきをあふお急お急お急  
うきお急お急—お急お急お急  
お急お急お急お急お急お急  
お急お急お急お急お急お急  
—お急お急お急お急お急お急  
お急お急お急お急お急お急  
思ひお急お急お急お急お急  
お急お急お急お急お急お急

○消息後編下







○同巻四の君は返事

幸どろハ杉のまゝもねきや  
うそでだづねきあえさくへきか  
されくめん男うあつふふは  
もくもれくそねん人いよ  
といろうくもおーくわらせたま  
いさうれ。うらまそそれ  
しんごさそそふあらけき  
ひーあいまふれり

幸し本は返事もおのれくは尋  
しん南もすしとせなり不敵の  
大恨を極をめん是んすらあ  
扱ハハ甚歎あは推量しは  
ウリス終りりハ方ハは所を

お辨無十方、閑居ハ心底  
私社お傍りハ成ハはた

○同巻大徳王殿の八講の時

左大臣殿より

はふふとぶらひふのせんそ  
あひつれどあーれけおらうそ  
さうぞくはる事のくーれ  
をめんこれハまーはうりさ  
げさせあへそねん

今日ハ是れハハ尋向アハ  
存ハ脚氣多記ハハ武技若  
用ハ路成致ハハ得知ハハ  
此ハハ寸志述ハハ供まハハ  
存ハハハハ





○同四の巻左大行殿の昨君より  
帥殿に許す

はよのこゝろにさへゆればおぼやごら  
せんこゝろんとし先づもまひ  
てゆくごふあつものさあがひさく  
おしりあくれぬ

明日ハは出立す承知はゆるるや  
斗の混雜はぬりかゝるなほい  
は名沙と惜ゆるも振切はたさ  
りぬゆゆも有く上こ移し心遣は  
供はゆゆと氣振はゆゆにおぬい  
ゆゆと後引をなほ

○さごらも二の巻大郎より大郎  
のりくに

おれづりか先のおそふおくる  
までゆればそのゆりゆりより備  
前よとよりそごらよあのおじ  
先よかくはま〜と〜と  
ゆき思〜あ〜

下拙く家内候にお宗やゆゆ  
右〜ゆゆとゆら備前と運るは  
ゆ下向よりゆゆと不吉は後と次  
友をなほ

○同三の巻さごらもより嵯

峨の院か

ゆ〜あり〜ん〜ひの後  
やうて出〜らゆ〜るゆ〜んえぬ  
山ゆもゆ〜る〜〜か〜らひゆ

○消息後編下 ○四十六



一ひふふひおくへきも  
 ゆりたれは心よきと痛うゆり  
 下げさくやいふう心よき  
 とひゆりまじり。いひらえ  
 つきせぐおと思ふうおわれし  
 ほどふたえもてねて  
 醒ぬ心得給ふ後別おきお  
 中道きく候も何付し事し  
 松く世合のえき云は候も  
 元ゆき未結。お清ゆり今朝ハ  
 愚癡お増甚後悔ははる別  
 悲歎るる縁倒もあは一命も  
 辛方も難そ候と歎息に  
 ○同四の中巻皇后宮より女君

の心ゆりて

日ひいゆくつぬくおほつらあき  
 とと思ひゆりつらにひいぢら  
 きやどやう宰相のせう  
 ありやそくぬりてゆれど川  
 とひ柳にむらうまやゆり  
 ちれくハホきさ枝まこ  
 と候そけえの物よきあう  
 ひい  
 以程ハ心候もお新あや  
 心候と心あきしお新あや  
 相と進む心入るぬり  
 安んぬ波ゆり家物と候ハ  
 ぬりお新あや心候と心候

○消息後編下

○四十七











こすれあす名のそしりてかて時  
そわされきる年におけしきま  
そかぬまよれ中のせせりてま  
ひましく思ひてまぐりけり  
経ふわりのまはるちりふあは  
しいでかやうにあらせられ  
こゝのほろれしきまよてまぐり  
かほせのまよしたまふまはるちり  
あれうとく  
あはれ道をとれはるまよとまを  
けり心はるま方とま事しり  
朝夕心はるま方とま事しり  
あはれ心はるま方とま事しり  
あはれ心はるま方とま事しり

勤行の妨とお取ん進はあはれ  
けり忘草の名とまよる月明も  
春忘れぬはまよのま事しり  
そしあま今とま存ありまはる  
あはれ年とま心中の思はるま  
けり心はるま方とま事しり  
あはれ心はるま方とま事しり  
あはれ心はるま方とま事しり

○同下巻非君住吉より父中

細玄殿のりてに

あはれ申しそよのまのびがてまよ  
申しそよのまのびがてまよ  
らんとあまがけりまよるま  
らんとあまがけりまよるま







今ひてとむまありておらんぜ  
られでやまけりあんと思ひぬ  
らるまねん。いふうかあしう  
けりありまよゆうしきあり  
しきよりとあほえのふとあり  
あがりふとふうもつわご  
う那いともん思ひあり  
爰え進いそ新く系若は瘵  
人う身といふたゆか今一食  
心系所目見もゆあは是路にお  
ぬゆとまねゆゆと減ふ悲歎  
お迫うすゆる類といふゆお同  
なゆけ山と大江山とやゆい  
若き名詮とる存けり

入はゆ候とあ身と物ゆは

○同卷大武有國より帥殿の

ゆゆゆ

思ひうはぬかこおとまはし  
たふふ系のもすまあはつゆ  
ねどまきねづらまわりま  
ふづきよ九玉のさまてまぶら  
まちれまざんがふ思ひのまゆ  
おえまゆりゆりうねよおん  
いすまできこえぬゆゆわた  
おはせこふちんあこひつ  
うまろまづきまのゆいのら  
かくまぶらひらまわがまの  
末ふつうまゆまづきまねん

○消息後編下

○五十二



おのひまうら  
おをき方へは出候をわをけに  
尋入且京北へも候も之は  
信ゆり身命と云は下九加と  
守護と候をんぬは流るる者  
く存を存りしはゆふ公ありん  
る唯今近し何ありん何の  
お作自治身は利お初可やん  
安安寒の長寿は合に主人  
様く所血統に用てお初ありん  
存ん

○同楚王の差れ巻内堂の大御

言殿の内廷事

か一まきりてうけぬりぬ日

これ中御その心くく一にふりの  
一あふさとりあへあつうひつた  
ねまうりてもの一あへいごうり  
ごちまご一のどお思ひあつた  
終まきのよよりておける人乃  
心くあましくごづらひまをんも  
あつ心あうるまへあつうひつた  
おおのうらあまたごまはらげ  
月頃をあさきううねう帰  
げうそのをさきしゆりつた又  
うくゆればおまごもあひあ  
へられびあんさてまこと人いよ  
ろくうれまごをゆわねこいや  
がてくうーげおあまうれは

○消息後編下

○五十三







うへは男のまゝせのありひきり  
れゆりてきくらえさせびととら  
中させあへ

雨く降るも打く少く心之寄  
あは下少公す度後方く  
西家内様は力果因果存南り  
少ゆき西文色く必終少分置  
心信まてまひん

○枕草子七の巻頭辨より

清少納言に

のちれり〜はのりあはう  
うらねんひる夜をまほして  
むか〜おごりもきまえあうさ  
ん〜せ〜とまほさるよめ

ほされて

後朝〜まゝ実〜神〜まき物  
少だん夜通し〜昔〜西公世  
十明〜海岳〜不語鳴〜はれ  
澄ゆるなまき〜少別〜ん

○大和お終下の巻宮の西も

〜に伊衡宰相中将乃

は返事

〜〜〜れ〜〜〜いあ〜あさま  
〜〜〜か〜るやまひも〜〜〜のふ  
おんあり〜る 多神おひと  
あらねどもま風のふけバか  
〜〜我乃お〜りけり  
滅ふ程有心尋向り〜下〜後

○消息後編下

○五十五







